



“Dr. ジャン・シーのヒューマンファクター研究室”

No. 22 〈リスク認識不足〉

タイトル：良かれと思ったことの危うさ！

【事例】

作業員は、非常用ディーゼル発電機室（ED/G 室）の壁の塗装作業を実施していた。塗装作業によって、塗料が排気ルーバーに付かないようにと、ルーバーを養生しようとしていたところ、ルーバーを塞いでも問題ないか運転員に確認するよう指摘された。確認した結果、ルーバーを塞ぐと ED/G への給気用非常用送風機の系統機能が喪失することが判り、トラブルの発生を未然に回避できた。

【ヒューマンファクターの視点から】

原子力発電所は、複雑なシステムで成り立っています。一見、普通の排気口や機器に見えても、それらが重要な役割を持っていたり、思いもしない場所や機器が関係していることがあります。

今回のように、作業の中で「良かれ」と思ってした養生が、発電所の安全機能に悪影響を与えてしまうことがあります。これは、発電所内で行うどのような軽微な作業であっても、「“もしかしたら” プラントの安全に影響を与えるんじゃないか」と、注意深く自分達の作業や自分自身の行動を見つめていないことが主な原因です。

人は得てして、「悪さ」に対しては敏感になり、連絡や報告をしなければいけないと考えますが、「良かれ」と思ってやることには、連絡や報告の必要が無いと思ってしまいがちです。

原子力発電所は、様々な役割を多くの人で分担しあって運営されており、現場の環境は刻々と変化します。だからこそ、細かな事でも確認する、そして連絡や報告することが求められています。

「予定外の作業」が必要になった場合はもちろんのことですが、「十分に確認できていない作業」の場合や「現場の状況が計画と違っている」場合など、「“もしかしたら” プラントの安全に影響を与えるんじゃないか」と考え、細かな事でも管理者や監督者に報告・連絡・相談をして、確認してから作業を行いましょう。

“もしかしたら”と自問し、確認してから作業をしましう。